



島地勝彦のスペシャル人生相談

週刊プレイボーイを100万部売り上げた伝説的な編集長で、現在はエッセイスト&バーマンの島地勝彦氏が本音で語る『スペシャル人生相談』。豊富な人生経験と独自の人生哲学であなたのお悩みに回答する——。

〈続〉今年のゴールデンウィークは心から欣喜雀躍して面白かった

島地先生、ぼくは31歳のサラリーマンですが、今年のゴールデンウィークは12日間もあったものの、予定も特になく鬱々と独りで過ごしました。島地先生はこのゴールデンウィークはどう過ごされたのでしょうか。

(31歳、男性、会社員)

——相談者はゴールデンウィークを何もせず鬱々と過ごされた一方、85歳のシマジさんはワクワクしながら世界的に有名な岩手県一関の「ジャズ喫茶ベイシー」に長時間入り浸り、楽しい日々を過ごされていたんですね

シマジ 相談者には本当に申し訳ないが、毎日毎時笑い転げていましたよ。人生は一度しかないのです。いまサロンドシマジのバーのカウンターでは、乾杯の言葉としてマスターのわたしがラテン語で「メメントモリ」と言うとお客さまは「カルペディエム」と応答するのです。

——そのラテン語はどういう意味があるのですか
シマジ ヨーロッパの修道院で先輩の牧師が後輩の牧師と廊下ですれ違うとき、朝でも昼でも夜でも、先輩の牧師が「メメントモリ」と言うと、後

輩の牧師が「カルペディエム」と応対するそうです。メメントモリはラテン語で「死を忘れるな」という意味で、カルペディエムは「今日という日を一生懸命生きます」という意味なんです。いずれみんな必ず死ぬのだから、それまで人生を精一杯愉しもうではないか、とわたしは常々思っている。

——素晴らしい対語ですね

シマジ 今回相談してくださった31歳の若者にこの言葉を捧げたいですね。31歳の若さで折角の長い休日を鬱々と独りで過ごすのは、ある意味で罪悪だと思います。国内旅行でもいいが、思い切って地中海に浮かぶマルタ島に一人旅に出かけたり、読書をして自己研鑽を積むとか、人生の日々を大事に過ごすべきでしょう。

——ところでシマジさんは、一関でどう愉しく過ごされたのですか

シマジ 毎日、大牢の滋味のオンパレードでした。一関に着いた翌日のランチは、一関市の「富澤」という魚屋が奥座敷で美味しい三陸の魚を料理してくれて、特筆すべきはホヤとウニ丼ですかね。しかも東京の半値なんです。同行者の1人は「シマジさん、こんな美味しいホヤとウニ丼は初めて食べました。これからはシマジさんの言うことは何でも聞きます」なんて興奮気味に言っていました。それくらい旨かったですね。

——それからまたベイシー詣でですよ

シマジ 実は我々3人とベイシーのマスターである菅原正二（以下、正ちゃん）は朝9時にベイシーの前で待ち合わせて、岩手県平泉の中尊寺に眠っている今東光大僧正のお墓に掃苔に行くことを前夜ベイシーで打ち合わせしていた。わたしは何度も大僧正のお墓を訪ねており、いつもは裏道から入って行ったのですが、今回は正ちゃん

が「堂々と正門から行きましょう」と言うので従って行くと、中尊寺の駐車場は遙か下の方。わたしは杖をつき急勾配の坂を上ろうとしたら、正ちゃんが車椅子をどこからか借りてきてくれた。長い急な坂道を70キロあるわたしを車椅子に乗せて2人がかりで押し上げてくれた。同行した友人らが金色堂を参拝したいと言うのでわたしと正ちゃんが待っていると、正ちゃんが「先輩、ちょっと待っていてね」と言い残して姿を消した。

間もなく正ちゃんは僧侶とともに現れた。そのお坊さんは正ちゃんの一関一高の同級生と言うのではない。突然の僥倖にわたしの心は飛び上がった。中尊寺の住職の名前は佐々木邦世さんと仰った。住職をお連れしての今東光大僧正の掃苔に行くとは夢にも想像していなかったもので、正ちゃんがいままで黙っていてわたしを驚かせて喜ばそうとした計略にわたしは欣喜雀躍した。それから5人そろって今東光大僧正のお墓へと向かい、持参したお花を供え、白檀のお線香を焚いた。すると同時に佐々木邦世住職の荘厳なお経が聞こえてきた。今東光大僧正もさぞ喜んでくれたことだろう。わたしはまた今東光大僧正のことを想い鳴咽した。

——しみじみしてきますね

シマジ その後正ちゃんの1人娘で若くして亡くなったわとちゃんが眠るお墓が中尊寺の近くにあると言うので、4人で訪ねて白檀のお線香を焚いてお祈りした。そして正ちゃんをオープン間近のベイシーに送り、我々3人は「富澤」に向かったのです。それからベイシーに行くと、わたしが週刊プレイボーイの編集長をしていたときの重要な編集部員だった懐かしい田中照雄がいるではないか。「おお、テリー、お前どうしてここにいるんだ?」「編集長、お久しぶりです。実はわたし、女房の実家が一関でして女房と一緒に初めてベイシーに来たんです。まさかシマジ編集長にお会いするとは、嬉しい限りです。」「テリー、こちらにおいで。正ちゃんを紹介しよう。テリーは喜び勇んで飛んできた。他のお客さまたちはコーヒーを飲みながら静かにジャズを聴いているなか、正ちゃんを囲むVIP席では静かにわたしが持参したサロン・ド・シマジのウイスキーを飲んでいて。大酒飲みのわがテリーは水割り何杯か飲んで気持ち良く出来上がっていた。テリーが隣にいた正ちゃんに言った。「菅原さん、ぼくは昔からベイシーに来たかつ

たんです。この雰囲気感動しました。また来てもいいですか。すると正ちゃんがドスの利いた声で「来れるものなら」と言った。それと同時に周りにいたみんなが大爆笑したんです。

——相談者へのアドバイスはありますか

シマジ 最後に相談者に伝えたいのは、仏教語で「遊戯三昧」という言葉がある。人生は遊びの中にこそ真実があるという天台密教の教えです。容赦なく時間は過ぎていく。退屈な人生は罪である。人生は捨てたもんじゃない。だから命ある限り全うして愉しく過ごしてほしいですね。

人生は
冥土までの
暇つぶし

島地
勝彦

島地勝彦氏
エッセイスト
『週刊プレイボーイ』（集英社）の元編集長として100万部雑誌に育て上げた。2008年11月集英社インターナショナル社長を退き、現在はエッセイスト&オーナーバーマン。『人生は冥土までの暇つぶし』（発行：日刊現代、発売：講談社）が絶賛発売中。東京・西麻布でオーセンティックバー「Salon de Shimaji（サロン・ド・シマジ）」のオーナーバーマンとしてお酒を振る舞い、本のソムリエとして読書案内も手がける。

「Authentic Bar Salon de Shimaji」

住所：東京都港区西麻布4-2-5 Art SiloビルB1F

電話：03-6427-1477

メールアドレス：bar.salon.de.shimaji@gmail.com

営業時間：平日18時～24時

土曜14時～17時（カフェタイム）

18時～24時（BARタイム）

日曜12時～17時（カフェタイム）

18時～22時（BARタイム）

（土日の営業時間が変更になりました。カフェタイムに島地氏は不在です）

定休日：月曜、祝日（祝日が金・土・日曜日の場合、日・月曜日の2連休）

オンラインショップ：<https://shimaji.base.shop>